織田高長　篇１

苦労人　高長

今回は江戸時代初めに宇陀郡を治めていた宇陀松山藩二代藩主織田高長（織田信雄（のぶかつ）五男）についてみていきたいと思います。

高長は、天正 18（１５９０）年に信雄が時の天下人豊臣秀吉と共に小田原征伐に参加し、改易された織田信雄にとって波乱の年に尾張国（愛知県）で誕生しました。高長の母は、後に加賀藩（石川県）前田家に仕える久保三右衛門の娘とされています。信雄の改易直後は、信雄の長男、織田秀勝の下に身をよせていましたが、最終的には、加賀藩二代藩主の前田利常の家臣として金沢にいたようです。また高長は前田家の家臣として、徳川家と豊臣家の戦である大坂夏の陣に徳川家側として参加したようです。

信雄は、上野小幡（こうずけおばた）藩（群馬県）藩主である織田信良（信雄四男）が寛永３（１６２６）年に死去すると前田家の下にいた高長を呼び戻し、信良の息子であります信昌（当時２才）の後見人として指名したようです。高長は、寛永７（１６３０）年に信雄が死去すると、信雄の遺領の宇陀郡3万石程を相続します。しかし上野小幡藩主である信昌の家臣と織田信雄系統の本家争いを起こしている。最終的には、江戸幕府は、宇陀領の相続と本家を高長が受け継ぐものとして認めました。

高長は、信雄により建造された長山屋敷（大宇陀地域事務所付近）を宇陀郡の政庁として使用し、万治（まんじ）２（１６５９）年に隠居するまで宇陀松山藩主として藩政を主導します。